

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

問題1. 文中にある「感受性の貧しかりしを嘆くなり倒れし前の我が身我がこころ」の作者の思いについてまとめなさい。(300字以内)

問題2. ここに述べられている「内発的发展論」について、あなたの考えを述べなさい。(500字以内)

「病氣」という文化

1997年は、わたしにとって回生——本当の意味の「回生」元年になりました。そこで、それ以前と以後との違いを考えてみると、人間は倒れてのちにはじまりがある、決して倒れてそのままで熄^やむのではない、ということを今しきりに考えています。それは何かというと、人間にとって「歩く」ということは、生きることの基本的な力になる、したがって、もしその潜在能力が少しでも残っているならば、どうしても「歩く」ことが生きるために必要になります。わたしは、1995年に倒れたけれど、1997年に歩きはじめて、本当の意味での「回生」がはじまったのです。

何が違ったかという、倒れる前と倒れたのち、倒れてのちに歩けない状態と、歩きはじめてからとの違い、これは比較社会学でいえば、比較することが非常におもしろい、異なる文化だと思えます。人間が病氣になるということがひとつの文化だと思えます。人間が歩けない場合と歩く場合では、文化が違うんですね。ですから、これは比較社会学の非常におもしろい領域になるのではないかと思います。

倒れる前と倒れたのちの文化の違いは、ものの見え方が違うということなんです。倒れたあとまだ歩けないときには、わたしは自分が死んだと思っていました。自分のなかには、半分死んで、半分生きている、死者と生者がわたしのなかにもともに生きている、そういう状態でわたしには、ひとつの新しい展開があったと思えます。

健康なときは、健常者の思い上がりで生きてきました。つねに競争相手を意識して仕事をする、つねに他者によって定められた時間に従って、メ^メ切のさし迫った仕事に追われている、そしてマックス・ウェーバーのいう「金力・名声・権力」をめざした競争を、多かれ少なかれやっていたと思えます。それを自分では批判しながら、やはりそういう状況のなかに生きていたと思えます。

そのときは、ものがはっきり見えなかったんだと思えます。こういう歌をそのころ作りました。

感受性の貧しかりしを嘆くなり倒れし前の我が身我がこころ

自分の心も身体感覚もすべて麻痺していたんだと思う。ところが、倒れて、半分死んで半分生きているという状態になったときに、非常に自然の事物が自分にとって近いものになりましたし、自然の事物を非常に鋭敏に感じ取ることができるようになった。それが『回生』に収めた歌なんです。

歩きはじめてから

ところが、そのときは歩けなかったんですけれど、杖をついてでも歩く、杖をついて看視つきで歩くようになりましたら、こんどは「活性化」が起こったんです。つまり、全身に血がめぐり、酸素がゆきわたる、そういう感じがからだのなかにみなぎってくることによって、頭もはっきりしてきたんです。意識を失ったことはないけれど、今までよりも、頭の働き、ひらめきが、ちよくちよく出てくるようになったんです。いろんな思いつきが、ぽっぽこ出てくるようになったんです。

そうしたらなんだか自分が、非常に新しい世界に入ったような気持ちがあります。そして、いままで考えていたこと——たとえば、わたしが中心に考えていたことは「内発的発展論」、それから南方熊楠についてどのように考えるか、そういった今までしてきた仕事について、どうしてもここから先が越えられない、どういふふうにここを越えていったらいいか、と思い悩んでいたところが、急にある日突然、あるいは寝ている間にある晩突然に、ぱっと開けてくる。というような状態が、昼間、もう足が一步も出ないほどに歩いて、もうくたびれ抜いて寝た日には、そういうことが起こってくるんです。

ですからわたしは、やはり『回生』の時期と、『回生』以後、つまり歩きはじめてからは、——倒れる前と倒れたのちは、基本的な転回だったんですけれども——それがもう一度、さらにひらけてきたといまは考えています。

ですから、杖をついて、よたよた歩きで、まだ誰かに看視していただかなければ恐い、という状況ですけれども、まがりなりにも「歩く」というこの状況を続けていきたいと思っています。

考えてみると「内発的発展論」というのは、倒れる前は理論として、理屈として考えていたと思います。しかし、今は本当に自分のなかにある内発性、それをどうやって展開させていくか——内発性っていうのは、一度出てきたらそれで終わりっていうものじゃないんですね。それをどのように展開していくか、その可能性を伸ばしていくか、それが上田先生のおっしゃる「積極的リハビリテーション・プログラム」というものと、まったく理論的に、思想的に一致するものだと思うのです。ですから、内発的発展論はリハビリテーションにも役に立つものだし、それから自分で内発的発展論を実感として体得している、と考えています。

ですから、わたしがいま考えていることは、倒れる前にやってきたことが、いま

新しい意味をもってわたしのなかに甦っている、わたしを支えている、この展開をいまわたしが不断の努力によって進めていくことができる、そういうことなのです。

内発的発展論の「内発性」ということの意味を、いま実感として、わたしの身の内に感じ取っている。そしてこれを、社会発展の理論として、それから人間の発展の理論として——人間の発展の理論であると同時に社会発展の理論である、そういう意味をもっているのが内発的発展論だと思うんですけれども——これを死ぬまで、気確かにもって、できるところまで展開していきたいと考えています。

「邂逅」（多田富雄・鶴見和子著，2003年，藤原書店）の「回生」より抜粋